

## 関東ブロック救助隊交流集会報告

教育遭難対策委員 吉川（かがりび山の会）

日時：2022年10月22日（土）～10月23日（日）

場所：埼玉県比企郡ときがわ町（実技訓練）、埼玉県秩父郡長瀨町（情報交換）

参加者：東京都連盟（3名）、神奈川県連盟（4名）茨城県連盟（1名）、千葉県連盟（2名）群馬県連盟（9名）、栃木県連盟（4名）、埼玉県連盟（主管 5名）

総勢28名、泊り18名

<報告>10月22日、埼玉県比企郡ときがわ町にある新柵山の中腹岩場で、救助技術の実技訓練を実施後、長瀨の民宿へ移動し、情報交換会を実施。翌23日午前中に各県連の救助隊の現状と今後について情報・意見交換を行った。

22日の実技訓練では、要救助者の捜索を想定して、谷筋への下降・登り返し技術、引き上げ技術、搬送技術についてチームレスキューでの訓練を実施した。



写真1：ユマールを用いた登り返し、ブレイヤーはグリグリを使用している。



写真2：リギングプレートにカラビナとプーリーを接続し、4倍力システムを構築してユマールで引く。



写真3：要救助者側にもプーリーシステムを構築している。



写真4：要救助者の介護懸垂にはラビットノットを利用

下降・登り返し技術については、フィックスロープを懸垂下降で下り、アッセンダー（ユマール）を用いての登り返しを行った（写真1）。引き上げ技術については、リギングプレートにカラビナとプーリーをセットし、4倍力の引き上げシステムを構築し、ユマールで逆流防止をしながら、引き上げを行った（写真2、写真3）。また、要救助者をラビットノットでつないで、介助懸垂する方法についても実技訓練を行った（写真4）。ラビットノットは比較的利用価値の高い方法であると感じられた。搬送については、時間がなかったため割愛した。



写真5：情報交換会での議論も活発に行われた

23日の情報交換会では、

- 1, 各県の救助隊の現状
- 2, アルパイン伝承、教育体制
- 3, 今後の救助隊の在り方

について情報交換を行った（写真5）。

救助隊が組織的に活動をしているのは、東京、神奈川で、群馬、埼玉は活動及び技術力はあるが、組織的活動は難しい状況。栃木、千葉、茨城は救助隊の活動が実質的にない状況。

組織的に救助隊活動が行われている東京、神奈川では、教育体制とリンクしており、アルパイン教育を体系的に実施している。散発的な講習では、なかなか人が育たないので、教育課程を定めた講習プログラムを作っており、岩登り学校などは募集するとすぐに定員が埋まり、講習生の出席もよい。こうした講習を卒業した若手が救助隊のメンバーとなる例もあり、次世代の育成にも役立っている。救助活動については、実質的には警察に任せ、警察の捜索終了後は民間救助隊に依存する県もある。

一方で、警察の捜索はおおむね3日で終了してしまい、また、民間救助隊は費用が非常に高くつくため、その後の捜索には、やはり救助技術を持った組織が必要との考えもある。また、実際の遭難現場で、救助隊の技術が役立った事例も数多くあり、救助隊の存続意義は高いものがある。若い人の中には、アルパイン技術に対する要望も多いことから、技術講習を通じて、若手を獲得・育成して救助技術も向上させる意識的な取り組みを行う必要がある。

速やかな救助活動に資する装備として、ココヘリの携帯を推奨することは良いが、ココヘリに加入しながら、発信器を持参しなかった例や、電池切れで捜索の助けにならなかった事例もあることから、注意が必要である。

次年度主管は群馬県である。どのような内容にするか意見を寄せてほしいとの要望があった。